

第十七章 早矢仕有的の逝去

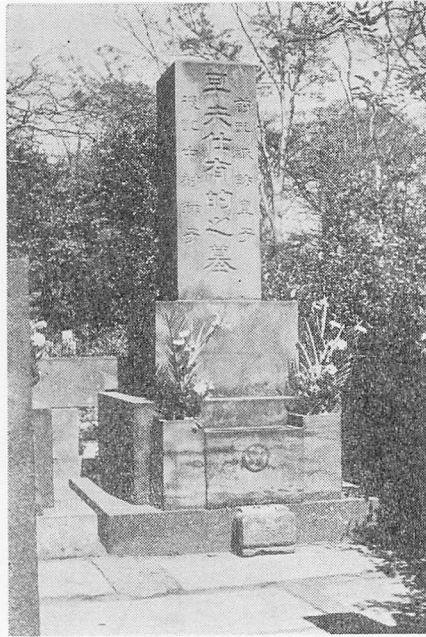
一 早矢仕有的の死

丸善が完全に再建された頃である。明治三十四年（一九〇一年）一月、丸善の創業以来これと深い関係にあった福沢諭吉は、宿痾再発してまた起たなかった。福沢の死が、彼を師として先輩として、久しくその指導を受け援助を得た早矢仕有的に取って、大きい衝撃を与えたことは、いうまでもない。この報を聞くと有的は、

「この次はおれか」

と淋しそうに洩らしたという。事実その以前から、彼は久しく胸部疾患（肺浸潤）に悩んでいたようである。ところがそれにも拘わらず、彼はそれから間もなく愛知県津具に赴いた。これは彼が晩年に志を傾けていた金鉱を調査するためであつたらしい。ところが身体が衰弱していたためか、彼は岡崎の旅宿で突然急性の胃腸カタルに罹って重態に陥った。この知らせに接した丸善は驚いて、旅客列車一輛を借り切つて、有的を東京へ連れ帰つたという。しかし、病勢はますます進んで療養も効なく、遂に二月十八日に有的は逝去した。享年は六十四歳であつた。

越えて二月二十一日に、小石川金富町の新福院で葬儀が営まれ、丸善の諸店舗はすべて三日間休業して、初代社長長の死に弔意を表した。



早矢仕有的の墓

有的の墓は、はじめ多福院に設けられたが、後に雑司ヶ谷墓地に移された。墓碑の撰文は小野正弘の手になり、書は吉田晚稼の筆である。小野正弘は詩人として知られている湖山の子で、金原家の諸事に参画し、当時丸善の業務に携わっていたものであり、吉田晚稼は長崎の出身で、維新の際山県有朋の秘書を勤め、後に書家として一家を成して、この頃丸善出版の図書の表題の揮毫に当たっていたものである。碑文は左の通りである。

中興之業尊王攘夷之名ニ籍リテ討幕開港之実ヲ行フ 是ニ於テカ実ヲ察スル者名ニ眩ム者冰炭相容レズ攘夷家ノ開港家ヲ視ルコト猶夷狄禽獸ノゴトク往々ニシテ殺戮ヲ恣ニシ以テ天誅ト称ス 維新ノ初メ五条ノ誓詔既ニ立憲ノ大義ヲ示ス 而ルニ当路ノ者專制ノ余弊ニ習ヒ加フルニ黜閹ヲ以テシ動モスレバ輒チ斯民ノ権理ヲ蹂躪ス 然レドモ尊王ノ名人能ク抗スルナク官尊民卑ハ誰昔ヨリ然リ 是時ニ当リ苟モ宇内ノ大勢ヲ察シ民人ノ公権ヲ信ジ信ジテ疑ハズ百折撓マザル者有レバ亦豪傑ノ士ニ非ルカ 早矢仕有的の先生ノ若キハ即チ其人ナリ 先生ハ美濃ノ人武儀郡笹賀村ニ生マル 先世林新助君ハ土岐頼藝ニ仕ヘ騎射ヲ善クシ戦功有リ 頼藝之ヲ愛シ氏早矢仕ヲ賜フ土岐氏亡ブルニ及ビ退イテ野ニ耕シ子孫世々農タリ 祖考才平君ニ至リ龜山氏ノ女ヲ養ヒ匠山田

[illegible]

愚按卷一曰驅羣羣主其羣經載其至令社法大有可感慨憐惜地方主狐牙羣曰吾曹既有日本人之名不可不知也日本人之分方全聚一國高懸標幟諸外人之手主其國力之長短非日本人之事也不於日本而於吾人者猶社主權讓以賊羣泰西書稱羣主歸羣主後有六商社之名聞明之本我當領事明治也從來社稷高懸標幟外人之事者皆外人之事及至先生公商社之記一時羣羣風頓革明治也社主權商人貴外品者皆外人自生獨以郵信西約才水商人告我其略略後後高懸標幟今所談者無幾區區民後後後民共有金于不獨高懸標幟而變白金可奪我權也貴自陳其其法投生法術街有一時所稱羣主不若信獨立自舉曰金可奪我權也貴自陳其其法投生法術街則以若爲天云明治三十四年二月十八日丙辰距生天條八年八月辛亥六十二又詳

小石川金富野多福院先生爲人懷直與衆特當重事法事業始志於食食有氣慨深重民權見吏令挾勢凌人者憎之如讎生平所當書談及屑言論談其不甚顯於世雖修九名商社之號名於中外聞社迄今無不稱享夫仕生爲此記其說乃氏三男二女七郎三男長次爲四郎卒於大次五郎出嗣村松氏次六郎繼配中村氏三男二女七郎嗣丸屋者七女八郎卽富藤合氏乃九郎嗣山田氏長女適和田氏次苗箇小柳津要人又爲友社次子爲社長與先生詞子故舊及社員所謂諸君勒先生性行事歷于葵月癸文於社以予亦當爲先生社務也予既視今也所謂諸君業業慨而慄焉回憶先生長風有肅然起敬者因不以下文辭謹敘其所知以與之

明治三十五年二月

東京慶土小野正弘撰

吉田晚校書

309

皆其胆略ニ駭ク 後撰バレテ横浜會議所議員トナル幾クモナク区長私ニ港民ノ共有金ヲ高島某ニ授ク 先生奮然トシテ起テ曰ク金奪フ可クモ民權奪フ可カラズト 因テ其不法ヲ具陳シ法衙ニ控告ス 一時ノ称道スル所ト爲ル 蓋シ本邦獨立自尊ヲ倡ヘ民權ノ伸暢ヲ論ズル者ハ実ニ福沢先生ヨリ始マル 而シテ躬ラ之ヲ行フ者ハ則チ君ヲ以テ嚆矢トナスト云フ 明治三十四年二月十八日病ミテ歿ス天保八年八月ニ生レシヨリ庚ヲ享クルコト六十又四ナリ 小石川金富町多福院ニ葬ル 先生人トナリ樸直真摯ニシテ事業ニ專注スルニ当リテハ殆ド寢食ヲ忘ル 感慨アリ 深ク民權ヲ重ジ吏胥ノ勢ヲ挾ミ人ヲ凌グ者ヲ見レバ之ヲ憎ムコト懣ノ如シ 平生実践ヲ尚ビ言論ヲ屑シトセズ故ニ其名甚ダシク世ニ顯レズ 然リト雖モ丸善商社ノ名中外ニ噪ガシク 闔社今ニ至ル迄称ヘザルハナシ 早矢仕先生ノ配諏訪氏ハ幕臣諏訪頼房ノ女 三男ヲ生ミ先ニ歿ス 長ハ四郎家ヲ承ク次ハ五郎出デテ村松氏ヲ嗣グ次ハ六郎ナリ 繼配中村氏三男二女ヲ生ム 曰ク七郎丸屋善七ヲ嗣グ曰ク八郎藤倉氏ヲ冒ス曰ク九郎山田氏ヲ嗣グ 長女和田氏ニ適ク次ハ猶幼シ 小柳津要人モ亦夙ニ社業ニ參シ今社長タリ 先生ノ嗣子故旧及社員ト胥謀リ將ニ先生ノ性行事歴ヲ募背ニ勒セントシ文ヲ予ニ屬ス 予モ亦嘗テ先生ニ從ヒ社務ヲ助ケタルヲ以テナリ 予既ニ今世ノ所謂実業家ヲ視テ慨シテ慷ス 先生ノ義風ヲ回憶スレバ肅然トシテ起チテ敬スルモノアリ 因テ不文ヲ以テ辞セズ謹ミテ其知ル所ヲ叙シ以テ之ニ与フ (原漢文)

二 有的の政治的活動

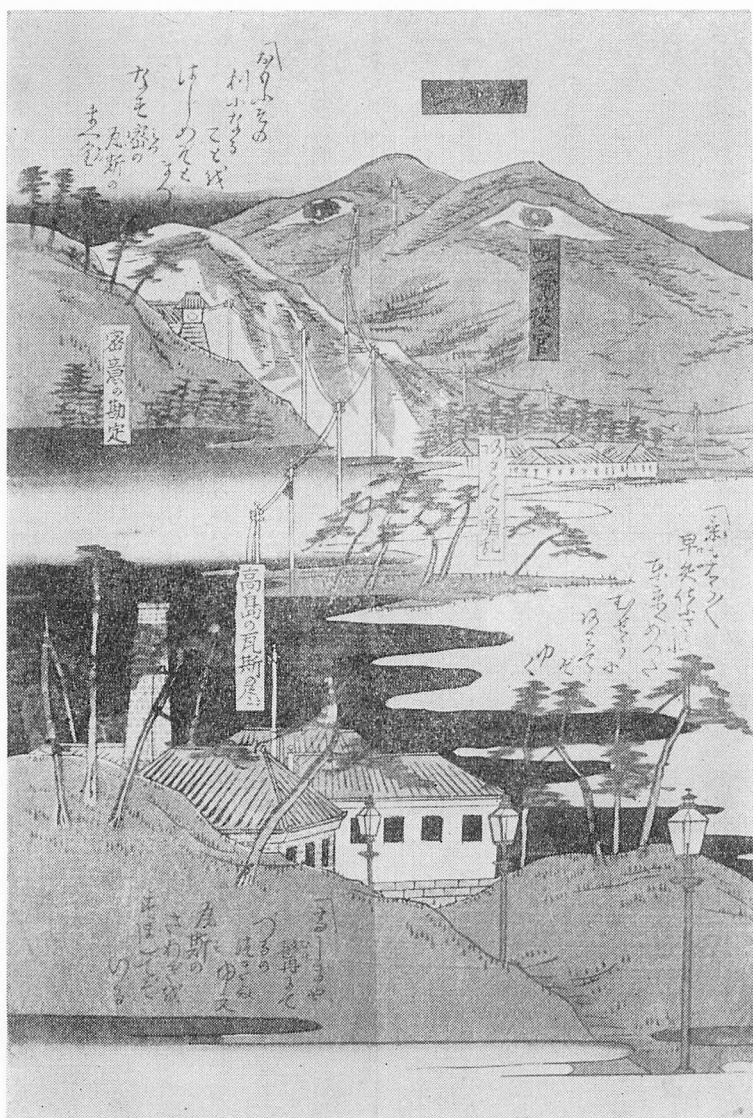
有的は、その前半生は医師として、またその後半生は実業家として活動したが、その社会的地位が高まるとも

に、彼はまた若干政治の方面、特に彼と縁故の深い横浜の市政上の問題にも関係するようになった。その最も有名なものが横浜瓦斯局事件である。

横浜瓦斯局事件とは、はじめ高島嘉右衛門の個人事業として出発したガス事業を、後に横浜町会所に委譲した際に関つた事件である。横浜は何といつても開港地であるために、早く新らしい燈火施設の必要があつた。たまたま駐在のドイツ領事にその建設の計画があつたために、高島嘉右衛門は、こうした公益事業を外人の手に委ねることを遺憾として、明治三年に、自己の出資金と大蔵省の貸下金とをもととして、ガス燈建設の事業を發起し、五年九月に至つて、市街に点燈することとなった。実に日本におけるガス事業の最初のものである。明治七年三月に、明治天皇及び昭憲皇后が横浜に行幸啓されて、これを觀覽されたことは、すこぶる有名である。

この時に高島と横浜町会所との間には、向う二十五年間、公共用の燈火は、このガスを使用する約束が結ばれた。しかしガス・ランプは、当時としては料金が高価であつたために、一般にはなお石油ランプなどを使用するものが多く、点燈した者でも料金の未払が嵩み、事業の経営はすこぶる困難となつた。そこで高島はついにその会社の施設の全部を、二十二万五千円で横浜町会所に売却した。これが明治八年七月に横浜瓦斯局が成立した事情である。

瓦斯局成立以来、区長がその事務長となつて、経営の改善に力め、また住民の需要も次第に増加したので、経営状態も次第に良好となつた。ところが明治十年七月になつて、区長は瓦斯局の利益金の中から一万三千五百円を支出して、これを高島に贈与した。これは高島から瓦斯局に引き継ぎの際に、年々利益金の百分の五を、向う三十五年間高島に支払うという約束があつたために、これを一時金として支払つたものである。しかし従来瓦斯局の經理



横浜瓦斯局

が公開されず、またこの一時金支払が区長の独断に由ったために、市民の間には疑惑を抱く者が多く、ついにこれを法廷に訴えて、一時金を返還させようとする動きが起った。早矢仕有的は、この時戸塚千太郎、桜井恒次郎、木村利右衛門の三名と共に総代となり、代言人高梨哲四郎を代人として、明治十一年一月に横浜裁判所に提訴している。これがいわゆる瓦斯局事件であって、明治初期の横浜市の三大事件の一つといわれるものである。当時の世論の一般は、新聞の記事や錦絵などによっても明らかである。

この事件はその年三月の横浜裁判所の判決によって、原告の要求は却下された。しかし五月になって、原告等は東京上等裁判所に控訴した。またほぼ同時に、横浜の十三カ町の総代朝田又七、戸塚千太郎は、瓦斯局は市民の共有物であるという趣旨から、瓦斯局取戻の訴訟を横浜裁判所に提出した。世論はますます沸騰した。そこで明治十二年の八月に、この紛争は小野光景、原善三郎等の仲裁によって示談となり、高島は受理した付与金を返納して瓦斯局との関係を絶ち、同時に原告は瓦斯局に関する訴訟を取り下げることとなった。共有物問題は、なおその後十年余に亘って解決しなかったが、明治二十五年二月に至って、瓦斯局を十二万円の価格で本町外十三カ所から横浜市に引き継ぎ、事件は全く落着するに至っている。

注意しなければならないのは、瓦斯局問題が、なお盛んに争われている時期に、有的が横浜区から県会議員に立候補して、これに当選していることである。それは明治十二年二月であって、同時に横浜区から当選したものには、平沼専蔵、戸塚千太郎、木村利右衛門、原善三郎の四名がある。有的が県会議員に立候補した事情については、明証を欠くが、恐らくは瓦斯局問題における原告としての立場を有利にするために、県会を利用しようとしたもので

もあろうか。

翌年六月に県会が開かれると、議長には今福元顕が、副議長には有的が選挙された。有的が議員として重んぜられたことがわかる。然るにそれにも拘わらず、有的はその七月に解職を申し出て承認されている。議員の職にあること一年六か月、副議長としてはわずかに一か月に過ぎない。伝えられるところによると、有的は在任中議席に姿を見せることが稀であったというが、貿易商会の創立等の仕事が多であったために、県会に出席することができなかったのか、あるいは瓦斯局事件の見通しがほぼついたためであるか、いずれにしても、解釈に苦しむ事実である。

三 有的の人物

早矢仕有的の人となりについては、墓碑の文章の一節に

「先生為人^{ヒト}樸直真摯ニシテ、事業ニ専注スルニ当リテハ殆ド寢食ヲ忘ル」

とあるのが、ほぼこれを尽している。全体有的は早くから医師として身を立てたために、生理学は勿論であるが、物理学や化学などの自然科学には、広く興味を持っていたようである。晩年まで種々の実験を好んで、金鉱石の分析まで試みたというのも、こうした性癖が現れたものに違いない。

科学者であり、合理主義者であった有的は、私生活では、はじめから文明開化の礼讃者であった。食物としては牛肉が好物であった。横浜では早くから開化亭がその行きつけの店であった。

開化亭は森井平吉によって、はじめ関内に後に（明治六年以降）不老町に移った洋食店である。あまり酒を飲むと肉の味が分らなくなるといって、注文があっても酒を追加しなかったために、因業屋、また一刻屋（いさだや）という通称があった。有的はなかなか舌も肥えていて、この店のビフテキの味が平素より劣っていたことから、料理人が代ったことを発見したこともあるという。

現在カレーライスのカレーを抜いて、トマト・ケチャップなどを味つけのペースとしたものをハヤシライスという。その語原についてこれを有的に結びつける説がある。幕末か明治の初年のことであろう。友人が訪問すると、有的は台所に有り合せた肉類や野菜類をゴツタ煮にして、飯を添えて饗応するのが常であった。そこから人々はこの料理をハヤシライスといい、ついにはレストランのメニューにまで書かれるようになったという。

しかしこの話はあまり面白過ぎる。英語でコマギレ肉のことをハッシュ（hash）といい、転じて肉と馬鈴薯や人参などの野菜との煮込みもハッシュという。神田佐久間町の三河屋は、明治初年以來の洋食屋であるが、ここではハッシュ・ビーフがよく流行った。これとライスとを合せて称したものが、ハヤシライスの語原に違いない。しかし三河屋も有的が最眞にした料理屋であるから、間接に関係があるといえ、いえないこともあるまい。

服装についていえば、有的は辺幅を飾らなかった。夏も冬服で用が足りるといって、一着の冬服で夏冬とも押し通した。そのためにズボンの尻が抜けて、家人は繕うのに困難したという。

序にいえば、有的は煙草が好きであった。殊に葉巻をよく吸った。その葉巻が短かくなると、妻楊子を突きさして吸ったと、岩田豊雄の聞書にある。

しかし有的はその合理的精神の旺盛なために、ある点では、いくらか誤解を受け易かったことも否めない。明治二年に有的の双生児の一人が、生後間もなく死亡したが、それを自身で解剖したという。また明治六年の元旦には、旧習打破を唱えて、横浜の店の大掃除を行なって、年始の客を驚かせたという。これらはいずれも世間からは、並外れた奇癖の持主として、受け取られたに違いない。

趣味として有的は碁を嗜んだ。これは他の遊戯よりも碁の競技の方法が、有的の合理主義的な性質にマッチしたのかも知れない。夜更けまで勝負を重ねて、店員が臥床する妨げになるために、支配人の小柳津要人が有的の不在の時に、薪割りで碁盤を打ち碎いたという話がある。小柳津は切腹ものという覚悟であったが、さすがに有的はこれを知っても、何事も言わなかったという。しかし勿論有的はそれで碁をやめたわけではなく、晩年社長の地位を退いてからも、丸善へ来てよく碁を打っていたそうである。

四 有的の文藻

有的はまた文学的の趣味もあった。晩年には和歌を嗜み、露の谷と号した。その作歌は、野平家や曾我家（早矢仕四郎の五女なつの嫁した家）に保存されている短冊や、その裏書を数えると、百首に近い。その中には初期の「学鑑」に掲載されたものもある。いまその若干を左に掲げる。

まきむく（纏向）の檜原の梢うちかすみ たかまど（高円）の宮に春は来にけり

咲く梅の香ひの内になりぬれば ふる淡雪も春めきにける

空だきの烟りにかほる心地して おぼろ月夜ににほふ梅が香

かすめどもまだ白雪は降る里の 美かきが原に若菜つむ見ゆ

川の辺に春菜つむ子が袖の上に なびきてかかる青柳の糸

楸生ふる清き川原も青柳の 春は緑のひとつなりけり

あさあけにしばしとてのみ来しものを 家路忘るる花の蔭かな

そことなく春の山辺にあくがれて また夕ばえの花を見しかな

こしかたの数をよみてはいとどなほ くれゆく春の惜しくもあるかな

夏

郭公声まつ頃は卯の花の うしとばかりは知らぬ山里

水清き野守が池に影見えて そらとぶ鷹のいさましきかな

あしやかた海士^{あま}のたく火の速かけに 友まどひして飛ぶ螢かな

秋

月清き窓にさやけき呉竹の　かげに声あり秋の夜の風

吹風の行ゑも見えでむさし野の　尾花が末によする白波

行秋の忘れかたみは山かけの　あらしも知らぬ紅葉なりけり

冬

今朝見れば横川の梢雲晴れて　ひゑの高嶺につもる白雪

四時の風物を詠じたものは、卒直に言えば月並であつて、その技巧にも格別取るに足るほどのものはない。しかし折に触れて身邊の雑事を歌ったものの中には、却つて作者の境涯や心情を知るよすがとなるものがある。

雑

たのみあるますら雄心まめやかに　まことうるまの市は榮へむ

ますら男の友の音すなり武士の　ふみうる道のちまたなるらん

これは士人立市と題する一首で、上の句は万葉集の元明天皇の御製を借りたものであるが、下句は丸善の店頭を詠じたと見ることもできるであらう。

なに事もなすとはなしに明暮れて　六十一年と老にけるかな

平凡ではあるが還暦に達した感懷である。

行末の千代をちきりて行く人を かへらしとたのむ宿のさひしさ

題に娘の門出を送りてとあって、長女の結婚に際しての父親の愛惜の情を詠じたものである。

教え草つみ得て花はかをとるも 実をむすばずば山吹の花

いささか道歌じみているが、二女が小学校卒業の折に詠じたものである。

おもひきや花の都のただ中に 人とする鬼のわれを待たんとは

野にあらず山にもあらず人ならぬ 人の心に鬼はすみける

恐らく金鉞などに関して、人に欺かれた時の歌であろう。

よしあしにうつろふものはなにはえの 月かげならで我にぞありける

世のうさを聞かですめとや耳なしの 山に我をば呼子鳥かな

いつしかとのどかにすめる心には うれしてふこともわすれいでにき

目鏡めがねにそへて

朝夕にかけて文見よ老のなみ わすれてわたる橋ともなりなむ

有的にはまたわずかではあるが漢詩の作が残っている。その一首を左に掲げる。

夜 憶 太 翁

夜色沈沈人寂寂

閑窓月落漏声遲

忽驚雲外梵鐘響

正是家翁読経時

巧みとはいえないが、有的の詞藻の一端を見るべきものである。

五 晩年の有的

「学鑑」第十四年第一号（明治四十二年七月）に「早矢仕有的氏」という一文があつて、有的の晩年の一面を伝えている。筆者は「善六」という小僧に擬した署名だけであるが、恐らく内田魯庵と思われる。

「上野の近所で、何だか知れにくい処だった。余り綺麗な家ではなかった。（中略）玄関の三疊だったか、二疊だったかの次が、八疊ばかりのお座敷だ。只見ると、床の間は、本だの、新聞だの、紙屑だの、瓶だの、鉢石だの、ガラクタで一杯だ。机の上も同様だ。先生は其前にお粗末な箱火鉢を控へて、洋服のまゝのアグラで、チビリ／＼と御酒を召上つてゐらつしやる。その周囲は大小の埵塙や大小の薬壘や、試験器や、今まで見た事もない奇妙な形をしたものが、座敷中一杯に散らかつてゐた。畳は薬のシミや穴だらけだった。

先生は五十位で、一見して極柔^{ごくろ}和な方だった。物言振^{ものいばり}も柔和だった。女のやうな口の利き方だった。（中略）「或時また先生のお宅へ使ひに行くと、取次の方が裏へ廻れといふ。夫^{それ}から裏へ廻ると、物置か炭部屋然たる

小屋の中から、先生がお顔を出されて、『此方へ入れ』と仰しやる。変だナと思ひながら恐る／＼物置小屋へ入ると、中央に大きな「カマ」が築いてあつて、土管の煙突が出来てる。周囲には藁塚の棚が出来てゐて、塚が沢山陳んでる。先生は忙がしさに、何だか分析じみた事をしてをられたが、ズゴ玉位な大きさの金の塊を手の掌に載せられて（中略）頗る御機嫌だつた。（中略）

「何でもアトで人から聞くと、先生は遠州あたりの山から出る金鉱の試掘中だとか、鉱石の試験中だとかで、先生はコンナ鉱石の分析をなさるにも、何でも自己流で骨を折られたのださうだ。先生は何でも自己流が好きで、『本なんぞが役に立つものか』といふ調子だから、鉱物分析をするにも、冶金学などは一向振向いても見ないで、自己流の勝手な分析をされる。随つて余計な骨が折れるし、一匁の金を取る為に要する時間も費用も莫大だが、先生はそんな事は関はぬ。何でも自分で工風しては、ドウカ斯うかやり終せる。」

しかしこの鉱石の分析について、当時助手のような仕事に當っていた長男の四郎の話によると、有的の実験は決して変則なものではなく、正則なものであったという。前の記事は、やや事を奇にしているのであろう。

ここに見えている金鉱の試掘については、有的は詐欺に罹ったという説がある。そのために有的の使用人であった岩吉という男がひどく憤慨して、有的を欺いた犯人を殺した事件があった。この岩吉は服役して出獄した後も、早矢仕家に入入していたという。

六 有 的 の 子 孫

有的は子福者であった。最初の夫人なを（諏訪氏）は、四郎、五郎、六郎の三男を挙げた。しかし六郎を生んだ産後の肥立が悪くて、明治九年二月に歿した。有的は間もなく後の夫人ろく（中村氏）を迎えたが、ろくは、七郎、八郎、九郎の三男と、辰、美祢の二女を挙げた。男児を出生順に数字で名づけたのは、ありふれたことであるが、長男を四郎といったのは、その理由がわからない。この四郎は、東京大学ではじめ文科に、後に工科に学び、化学を専攻した。父の關係によって、一時中西屋書店の経営に当たったが、同時にまた駒込の丸善のインキ工場でインキ製造の主任となり、後には工作部の顧問のような地位にあった。昭和二十八年六月に、八十四歳の高齢で歿した。父の性格の一面を最もよく伝えたのは、この人であったといわれる。

次男の五郎は名古屋の村松彦七の養子となり、昭和六年九月に歿した。子がなくて、その系統は絶えた。

三男の六郎は、丸屋善八の名義人となった。岐阜県美濃町の電力会社（現在の中部電力の前身）に勤務したが、後に名古屋に移り、昭和二十三年静岡県掛川で歿した。

七郎は丸屋善七の養子の名義になっている。二十歳の頃（明治三十年頃）神戸元町に小さい洋品店を開き、丸善の名で化粧品、運動具等を販売した。はじめは書籍もある程度取り扱ったようである。昭和二十年に歿した。

八郎は藤倉姓を冒した。これはその当時徴兵を避けるためによく行われたことで、廢姓を継いだらしい。松下包次郎の女を娶り、大正九年から昭和七年まで丸善横浜支店長として在任したが、昭和三十一年に歿した。

九郎は明治三十年に中西屋の名義人となったが、大正九年に歿した。

長女の辰は明治三十一年に和田治衛に嫁し、昭和十六年に歿した。その長男の耕平は、戦後丸善の子会社として発足した丸善化工株式会社の社長となっている。

次女の美祢は、野平道男の次女に嫁した。野平道男は、後に三井物産の上海支店長となった。美祢は有目的の末子であったから、最も最後まで存命であった。晩年には起居不自由であったが、本書の編纂者の一人は、その寓居を訪うて、親しく話を聞いたことがある。しかし昭和四十四年に歿して、百年史の完成を見るに及ばなかったのは、まことに残が多いことである。この章を終るに当って、深く哀悼の意を表する。